



四小だより

令和7年 6月 26日
府中市立府中第四小学校
校長 安原 一朗
No.3



個人面談始まります ～「なんでもかんでも褒める子育て」でよいか～

校長 安原 一朗



6月下旬、あるお母さんと立ち話をしました。そこで、「学校からは、『いつも自己肯定感を高めるために褒めて、自信をつけてやってください。』と言われるが、なかなか難しい。」という話になりました。『本人の自己肯定感が足りていないから、とにかく褒めて育てなさい。』と言われる。」とおっしゃるのです。

「褒めて育てる」とか「叱らない教育」は、1990年代あたりから急速に学校教育に浸透してきました。私も教師になりたての頃から「児童の自己肯定感が下がるから通知表の所見欄には、いい事だけ書きなさい。」と指導されてきました。これは子供たちを傷つけず、できるだけポジティブにしようという考えによるものなのでしょう。しかし、逆に「それをしたら子供のためにならないのではないか？」という意見もあります。「なんでもかんでも褒めてばかりいたら、いつかその子は褒められないと何もできない子になる懸念がある。いけないことはいけないとしっかりと言うのも親の愛であり、大人の務めだ。」という主張です。

本校では、4年前から1・2学期は所見の替わりに個人面談を実施しています。いいことだけしか書かない所見よりは、実際にお会いしてお子さんの課題や頑張っているところをお伝えした方がいいだろうと考えたからです。

親という存在は、何百年、何千年前からうるさいものだったようです。おうちの人は子供にとって、うるさくて当たり前です。昔、担任した子供で、「うちのお母さん、うるさくていやだ。」という子と「うちのお母さんは、理解があって友達みたい。」という子がいました。私の経験では、前者の子供たちの方が、圧倒的に真っすぐに育っているように思います。

叱るときのこつは以下です。片方の親が叱るときは、もう一人は子供たちの視界から消えるといいです。叱るのもなるべく短く簡潔にして、終わったあとは叱っていないほうが出ていき、黙って抱きしめてあげます。黙ってというのは、おうちの方々は同じ考えだということを知らせるためです。「お父さんお母さんはどんなに叱っても、君のことを絶対に嫌いにならないよ。」と態度で示すためです。「あなたのことを信じてるよ。」とか「大丈夫。あたならでできるよ。」と言葉で伝えるのもいいと思います。教師も含めて子供の周りの大人の意見が違うのは子供のためになりません。

学校でも、児童を叱ったあとは必ずフォローをします。一度叱ったら、もう終わりです。あとは普通に接するだけです。叱ったことを繰り返し取り上げて、特にフォローすることはしません。少し時間を置いた後、一言二言他愛のない会話をします。まだ、子供がぐずぐずしているときは、「もうおしまい。切り替えるよ。」と明るく伝えます。

子供が傷つかないようにと大人たちが過保護な環境をつくり、子供たちの失敗経験が奪われているせいで、失敗経験が乏しく、失敗に対する免疫がないため、いざ失敗すると大きな心の痛手を負う。そんなことを起こらせないように、今後も、多磨っ子をおおらかに、真っすぐに、たくましく育てていきましょう。